

第3回クロマツシンポジウム記念講演

2006. 11. 11 酒田市総合文化センター

演題 「環境保全からの自律的な地域創造」

ークロマツ林とのかかわりで育つ人と地域ー

金沢工業大学情報フロンティア学部 教授 敷田 麻実

【プロフィール】

昭和35年(1960)、石川県加賀市大聖寺生まれ。石川県立大聖寺高等学校卒業後、高知大学農学部栽培漁業学科へ。同学科卒業後、昭和58年(1983)、石川県水産課に勤務。その間、平成2年(1990)から14ヶ月間、ロータリー財団奨学生としてオーストラリアのJames Cook大学理学部大学院に留学し、沿岸域管理学を専攻、Graduate Diploma in Science 取得。

帰国後、金沢大学大学院社会環境科学研究科博士課程を修了し、「今後の沿岸域管理システムに関する社会経済学的研究」で博士号を取得。平成10年(1998)、石川県を退職して金沢工業大学システム工学学科助教授に就任。平成14年(2002)から同教授。平成16年(2004)から金沢工業大学情報フロンティア学部情報マネジメント学科教授。平成17年度(2005)より野生生物保護学会会長、現在に至る。

専門は沿岸域管理学、エコシステムマネジメント、観光と環境。

司会 庄内海岸のクロマツ林をたたえる会事務局長 高橋弘哉

これまでの2回のクロマツシンポジウムは、地元の人間の中で企画をしてみました。外部といえば語弊がありますが、第3回は客観的な御意見を伺いたいということで、どなたにしようか、迷わずに敷田麻実先生にお願いしました。

今回は「環境保全からの自律的な地域創造：クロマツ林との関わりで育つ人と地域」という演題で講演していただきます。我々庄内地域の人間とも縁の深い方で、これまでもたくさんの交流をしていただきました。それでは、敷田麻実先生からご講演をいただきたいと思っております。

金沢工業大学 教授 敷田麻実

こんにちは、今、立派なご紹介をいただきました敷田でございます。名前が麻実なのでご期待の向きもあるかと思いますが、私が本人ですのでよろしくお願いします。

私はこちらには何度もお邪魔しております、話す方としてはリラックスさせていただいております。今回お話させていただくことは、私はこちらのクロマツ林の活動からむしろ学ばせていただいたことです。皆様から学ばせていただいたことを逆にお伝えできればと思っております。

最初に質問させていただきますが、この数字の意味がお分かりになる方いらっしゃいますか。実は上は $\sqrt{5}$ 、下は円周率ですね。この数字については、みなさんよくご存知の数字ですが、これが、別の形で示されるとなかなか結びつかない。見慣れた数字でも数字だけ並べられるとなかなかわからないものです。

なぜ最初にこんなこと申し上げるかという、私が一方的に話しますと、私が話す側、みなさんが聞く側で立場が分かれてしまいます。立場が分かると、私はここで眠るわけにはいきませんが、



みなさんは聞く側なので眠っていても怒られない。どうしても聞くだけになってしまう。先ほど、一緒に数字について考えていただいた方は、実は、私と同じ当事者の視点に立っていただいたということなのです。

最初からこんな話をするには理由があります。今日、一番お伝えしたいことは、いかにして当事者になっていただくか、当事者になっていただくような活動をするかということです。もう1つは、私がこれからお話することは、みなさんがご存知のことです。それを「よそ者」の私が申し上げるわけで、よその視点から見るとこういう説明になるんだな、ということで聞いてほしいのです。

さて、先ほどの数字ですが、みなさんは「その数字は知っている、それは円周率でしょう」と思ったわけです。私が「よくできましたね」と申しますと、「できたな」と、「もう一遍やってみよう」と思うわけです。これは、いろんな活動をやっていくときに、活動をする人が持つパターンです。みなさん、環境保全が重要だということはわかっているけども、それが結びついていない。それが結びついたらこういうことですよという表現をすると、先程、中学生のみなさんが表現をされていましたね。こういう活動をやりました、こういうことかというパターンを知り、では、一度やってみようとなるのです。

今日のお話ですが、5つ用意しています。最初は他の環境保全の現場ではどのような活動パターンがあるかについてお話します。それから、クロマツ林とみなさんの関わりの変化、これは私が見せていただき、こういうことでないかということでお話をさせていただきます。そして、どのようにして活動に参加するか、参加のしくみについてお話しして、次にみなさんの活動を私はどのように見ているのか、評価しているかについてお話しします。そして最後に、クロマツ林の保全に関わるそれぞれの専門家と、どのようにお付き合いをすればいいのかについてお話ししたいと思います。最後にこのお話をするのは、クロマツ林のお話だけでなく、いろんな場面で専門家と呼ぶことがよく行われているからです。今日、私もお呼びをいただいているわけですが、ある面では専門家としての期待があると思います。その時みなさんは専門家とどのようにお付き合いすればいいのか、関わる専門家はみなさんとどのようにお付き合いしたらいいのかについてお話します。

今日のおはなし
• 環境破壊からのストーリー
• クロマツとのかかわりの変化
• 活動への参加と自律的な地域
• 環境保全活動の評価
• 専門家と地域のかかわり

私はこのクロマツ林の活動を調査してきましたが、自分でも地元でラムサール条約登録湿地の「片野鴨池」というところに自身の活動の場を持っています。ですから、研究で得たものよりも、自分がやって得られたことを題材にしてお話をすることが非常に多くあります。これは、私がこちらで見せていただいたクロマツ林の写真です。ここで私は「クロマツ林の研究」をしたのではありません、クロマツ林に関わる人たちがどのような活動をなさったのかという研究をしてきました。

実はこういう研究は他でもやっています、たとえばこちらは「京都府京丹後市の琴引浜」、歩くと「砂が泣く」浜です。私達が見慣れたコンクリートの海岸ではなくて自然海岸、きれいな海岸です。

この海岸ですが、実は **CCZ** 計画、コースタルコミュニティゾーンという大きな開発計画がありまして、すぐ隣の海岸が大きく開発されてしまいました。だから、わずかにこの琴引浜が残ったわけです。非常に美しい海岸です。価値があるから残せばいいじゃないかという一方で、それがちゃんと残される例は非常に少ない、象徴的な例だと思います。そしてここには「守る会」がありまして、そのみなさんが一生懸命がんばって、海岸を守る活動を守っています。

一方こちらは、基地問題で揺れている沖縄の「泡瀬干潟」です。写真を見ると分かるように、非常に大きな干潟です。ここも開発が進んでいて、残念ながらこの干潟は来年には姿を消してしまう状況にあります。そしてこの写真の開発推進協議会のように、「どんどん開発しましょう」という風潮

も一方であります。

以上の事例から考えられることは、非常にシンプルです。保全の対象となる海岸や干潟が開発されたから「すべて終わり」ではないということです。むしろ「開発されたところから関わりが始まる」という事例が実は多いのです。

それからこの例では、守る会に入っているメンバーの関わりややり取りが濃密になってきている。また、活動をとてとても上手に進めています。上手というのは例えばどういうことかということ、先ほど、みなさんがご覧になったように、こんな活動をしました、この活動はこういう評価を受けましたときちんと紹介することです。ふつう会社だったら当たり前、こういう新製品ができましたとかマスコミで紹介するのに、環境保全活動でそうするのは少ない。自分たちがやっていることを言うことは、威張っているんじゃないか、PR をしているんじゃないかということで、話す人はあまりいません。

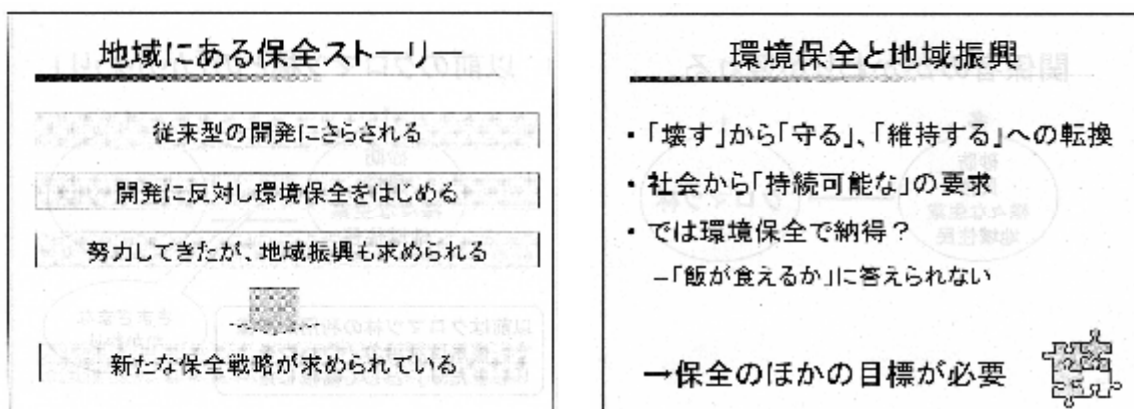
さて、地元の話にもどりますが、この活動のキーパーソンであります梅津さんをはじめ、みなさんが見てこられたのは、非常に大きな衝撃を受けられた酒田北港の開発という歴史的事実であります。現状をみせていただきますと、広大なクロマツ林を伐採して、こういう荒地を作ってしまったって良かったのかどうかという思いにかられます。でも、遅くはないというメッセージがそこにはあります。

大きな開発事業が示され、それに対して環境保全運動が起きる。これはよく聞く話です。環境サイドの人は、環境破壊の痛ましい現場を新聞・テレビでみて、保全活動を始めた人が8割を占める。しかし、反対しただけでは長続きしない。特に最近では、地域振興や何らかの「メリット」がないと、活動には参加できないという方も増えてきている。

そして地域でふだん生活している方から見ると、反対しているだけでは「ご飯を食べることができない」のです。だから、やり方を変えてください、単に反対というだけではだめですよと言われるようになっているのが、最近の環境保全活動の大きな特徴です。そこから分かるのは、「壊す」対「守れ」、環境保全だけでなく、「維持しよう」という方向性です。維持しようとするれば、その中で何らかのメリットを作り出し、環境保全にかかる手間隙・コストをまかなう必要があります。

ところで、今の私たちの社会では、「持続可能にしたい」と言われています。そこで、「地球温暖化防止」を大きく掲げてみるのですが、それはふだんの生活に何も関係ない、「それでご飯が食べられるか」と問われます。これに対して答えないで逃げているのは、多くの人共感は得られません。環境保全は「とても尊いものだから、高邁なものなのだから」と言っても、現実的には「どのような利点があるか」を伝えないと長続きしないのです。

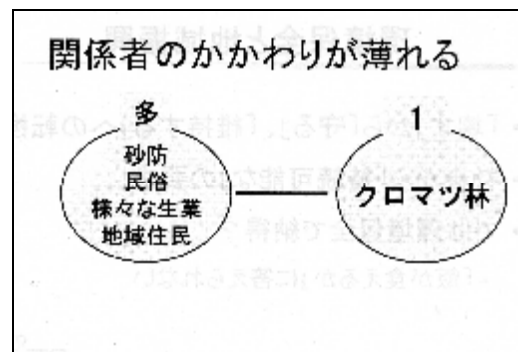
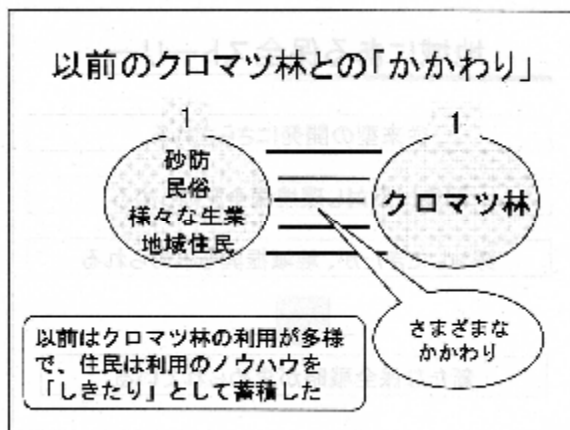
ということで、環境保全では、「保全以外の目標」が必要なのだということがわかってきました。それが今日のテーマにもなっていますが、「地域づくりや人づくり」であるのかなというのが、今日のお話しです。



さてここで、みなさんとクロマツ林の関わりについて、私が見てきたことをご紹介しますと思います。300年の歴史があると紹介されていますし、クロマツ林の前の森林の成立は何千年といわれていますが、記録が残っている300年を見ても、クロマツ林というのはいろいろな人がいろいろな関わりをしてきた。

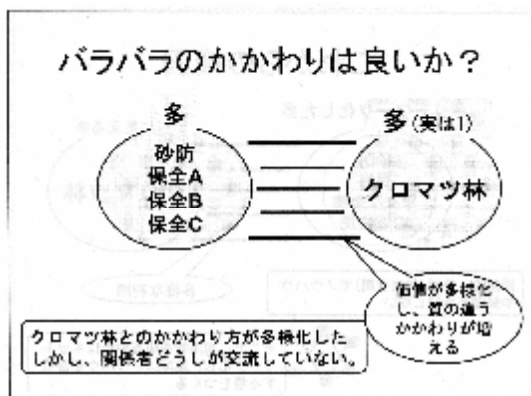
砂防で関わることもあったし、民俗的な面での関わりもあった。生業で関わりがあった人もいたし、生活の中で焚きつけにも使われた。クロマツ林で、きのこを採って売ることもありました。この人達はクロマツ林とお付き合いしても、付き合い方はすべてバラバラです。ところが、住んでいる場所が同じなので、お互いがどういうお付き合いをしているのか、よく知っていた。きのこを採りに行くのが見えていた。見えているからお互い勝手なことができない。以前のクロマツ林には、付き合い方の「ルール」があったということです。

しかし、その関係が「砂防」だけになってきてしまうと、クロマツ林は専門家に任せておこうということになる。専門家というのは、国や県の林業の専門家のことです。クロマツ林のことは「専門家に任せていけばいいじゃないか、私たちは税金払っているからね」というシンプルな関係になっていきます。



一方、環境保全のためにクロマツ林を維持しなければならないということで、いろいろな保全活動が生まれました。特に1998年の雪害を受けた以降は、クロマツ林に関わろうとする人達が多く現れ、保全グループがたくさんできた背景になっています。

ところがこうしたグループは、お互いに離れていて当時はお付き合いがなかった。すると、それぞれ「違うクロマツ林」とお付き合いするようになります。クロマツ林は1つのはずですが、「私はこういうお付き合い」というふうに、それぞれ別の「お付き合いの手」をクロマツ林に伸ばしてしまいます。そうなるとお互いのやっていることがわからないので、それぞれが「私のクロマツ林」ということで、勝手に活動を広げてしまいます。



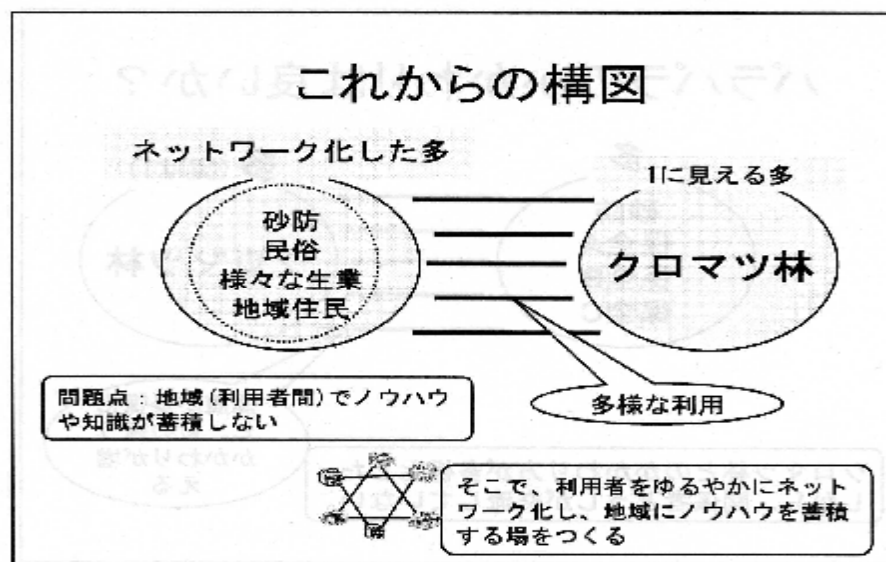
- 多一多 関係の問題点**
- 多一多の関係は「出会い系」
 - 出会い系の言い訳……
 - 開発者は「甚大な影響なく地域振興」と言う
 - 関係者が、好き勝手にかかわる
 - 地域にノウハウが蓄積しない

このような一方的関係というのは、実は「出会い系」とそっくりな関係を持っています。お互いが好き勝手に付き合いますよという「多対多」の関係です。出会い系というのは、携帯電話のメールを利用して、勝手に売る方、買う方が結びついていく関係です。そこで出てくる考えは、「自分は誰にも迷惑はかけていないよ、クロマツは少し切っちゃうけど、地域振興になるし」という言い訳と非常によく似ています。

そこにはお互いの関わり合いはありませんから、ノウハウの蓄積はありません。しかし、昔のような状態に戻すのは無理としても、いろんな保全活動をしてきた人達が、もう一度、お互いに関係することができれば、お互いのやることが目に見えるようになると思います。そこで情報交換すれば、こういう保全の仕方があるね、ああいう保全のしかたもあるねと、今風の昔のスタイルが再現できるのではないかとということです。

おそらく、このようなシンポジウムが運営されるような活動というのは、お互いがネットワークする活動ですから、「たくさんのクロマツ林」とおつきあいしているという錯覚が、「いろいろな保全活動が歩ければ、私たちは1つのクロマツ林とお付き合いしている」と実感することだと思います。そして、同じクロマツ林とお付き合いしている私たちの保全活動は、いろいろな情報交換や意見交換をしていく必要があるのだな、ということがわかってくるわけです。

そこでのポイントは、いろいろな人が情報交換すると、それぞれが得意なこと、それぞれが知っていたことを共有できるので、保全活動の中でのロスが少なくなることです。



さて、みなさんが活動に「参加する」ことですが、ここに足をお運びになって、お座りになれば自動的に参加ということではありません。実は参加には2種類あります。受動的に参加するのか、積極的・能動的に参加するのか、ということです。主体的に参加すると言ってもいいと思います。よく「私、何々に参加したわ」と言いますが、仕方なくいやいや行ったのか、自分から積極的に考えて行ったのかとは、ずいぶん大きな差があります。この差をわきまえていないと、「たくさん人が集まったからいいね」となったり、逆に「出席者が少なく大変だ」ということになってしまいます。

一方、単に参加すれば、環境保全、クロマツ林の保全が進むのでしょうか。そうではありません。自分達で何とかしたい、自分達が活動の成果を生み出してゆくことも必要になります。その時に活動を、自分達でコントロール、運営していけるか、というのが非常に大きな課題になってきます。国や県に言われてやる活動、これは長続きしません。金の切れ目が縁の切れ目になるからです。このように、大勢の人に参加してもらう、しかも主体的に参加してもらうという点と、もう1つは自分達で活動をうまく転がしていけるかがポイントになります。